



開 会 の 辞

公益社団法人 日本証券アナリスト協会

会 長 鳥 海 智 絵 CMA

本日、会長就任後初めて迎えるアナリスト大会が節目の第40回となることを大変光栄に思ひ、主催者を代表して一言ご挨拶を申し上げます。

本大会は、1986年の第1回以来、企業と資本市場の接点を議論する場として継続してきました。

大会プログラムを振り返ってみると、初期には情報開示や国際化への対応が重視され、その後はバブル崩壊や企業再編、ガバナンス強化に関する議論が続きました。近年は震災後の復興、ESGや人的資本の重要性、デジタル技術の進展や地政学的リスクといったテーマが取り上げられ、アナリストの役割が、財務分析から経営や社会をつなぐ視点へと広がってきたことが見て取れます。

記念すべき第40回となる本年のテーマ「国際社会の変容と日本企業の経営戦略—企業価値向上への新たな挑戦—」は、まさにこの延長線上にあります。

現在私たちは、複雑で不確実な国際環境に直面すると同時に、金融資本市場の大きな構造変化の過渡期に立っています。通商政策や経済安全保障に関する各国の動きは、世界の経済貿易秩序に新たな緊張をもたらし、ウクライナや中東情勢など地政学的リスクも依然として高まっています。

一方で、サプライチェーンの見直しや人的資本・サステナビリティへの注目は中長期的な競争条件を変えつつあります。加えて、AIを始めとする技術革新は、あらゆる面での構造変革を迫っています。

こうした短期の動きと長期の構造変化が重なる中で、企業には即応性と持続的な競争力の両方が求められています。

このような大きな転換の時代において、私たち証券アナリストの役割も一層重要性を増しています。情報収集機能や分析手法はAIなどのテクノロジーで高度化していますが、分析の土台となる文脈の理解、経営者の意図や選択を読み解く力、マクロと企業の間を結び付ける視点は、ヒトにしか持ちえない重要な領域です。データ処理の力と解釈の力を併せ持ち、投資家と企業の間「信頼の架け橋」を築くことこそが、我々に期待されている役割だと考えています。

本大会を通じて、「アナリストならではの」付加価値を探究し、直面する様々なチャレンジにどう立ち向かい、役割を担っていくべきか、改めて議論を深めていただければ幸いです。

今年の大会も、国内外の第一線でご活躍されている皆さまを講師にお招きしました。

記念講演は、お二人の方をお願い致しました。

まず、日立製作所 取締役会長代表執行役の東原敏昭様に、「日立の事業構造改革と今後のグローバル経営戦略」というテーマでご講演いただきます。

また、一橋ビジネススクール特任教授の楠木建様には、「逆・タイムマシン経営論」というテーマでご講演いただきます。

記念講演に続くパネル・ディスカッションでは、「国際社会の変容と日本企業の経営戦略—企業価値向上への新たな挑戦—」をテーマに議論を展開していただきます。

SBI証券 上席エコノミスト チーフ・ストラテジストでCMAの佐治信行様にモデレーターをお願いし、住友商事 常務執行役員 江田麻季子様、KKRジャパン 代表取締役社長 平野博文様をパネリストにお迎えして、ご議論いただきます。

今回のプログラムが、企業価値向上ならびに金融・資本市場の一層の発展につながることを期待しております。

ここで一言、若い参加者の皆さまへ。本日は、大学生の方、中にはすでに試験に合格され、実務や研究に意欲を持つ方もいらっしゃるとうかがっています。会場でご参加の方は、懇親会もありますので、遠慮せず多くの方と交流して、多くを学んでください。今日の大会が、アナリストの仕事に対する興味をさらに高めるきっかけになれば幸いです。

協会の現況について申し上げますと、現在、CMA資格の保有者数は、2万9千人強となり、

3万人の大会が見えてきました。改めて申し上げるまでもなく、CMAは、金融業界にとどまらず、事業会社やアカデミアなど、幅広いフィールドにおいて、資産運用、調査・研究、財務、IR、営業など、様々な分野で活躍しています。

それぞれのお立場からの多岐にわたるニーズに応えるべく、協会としても試験のカリキュラムやセミナーなどの見直しを進めています。

今後も、金融資本市場のダイナミックな変化に柔軟に対応しながら、協会の社会的使命をしっかり果たしていきたいと考えておりますので、皆さまの一層のご協力とご支援をお願い申し上げます。

最後に、本大会の企画・運営にご尽力いただいた第40回大会実行委員長である壁谷洋和委員長をはじめとする、大会実行委員の方々にはこの場をお借りし、心から御礼を申し上げます。

本大会が皆さまにとって、実り多く、有意義な学びと交流の場となりますことを心より祈念しまして、開会のご挨拶とさせていただきます。